

【 当方の得ている認識などです 】

● 《ごっこ遊び》は成人してからの『自己の歴史の中に発達を読む』ことの本動力となるものであり この『読む』ことは『自覚的に生きること』に繋がるものであるとされています。

● 幼児の各々は 生育環境によって《ごっこ遊び》による認識が異なるのは周知のことです。

・ 《ごっこ遊び》の世界と日常生活との捉え方の具体例が p.210 以降に記述してありますので ご参考にしてください。

・ なお 具体例の区分は目次には掲出されておられませんので下掲します。

(1)ある物や状況の意味づけを、願望(あこがれ)と現実の二つの視点から自在に反転させる [p.210~]

(2)ごっこの世界と現実の間で反転する表象は、さまざまな条件によって変化する [p.215~]

(3)子どもは自分の表象世界をどのように維持させようとするのか [p.222~]

(4)ごっこ遊びがほころぶとき [p.231~]

(5)ごっこ遊びの記憶が見つからないとき [p.236~]

● 当方も 石ころと硬貨 で同様の「空想遊び」をしたことや 紙片のお札 で《ごっこ遊び》をしたことを明確に記憶しておりますが 当現在まで口外したことはありません。

・ 著書の記述(別章)にありますように 保護者にすべての世界を語るとは限らない ことの一例でありましょう。

● 《ごっこ遊び》が『・・・自分の必要とする環境を自分の意志で築き上げてゆき、・・・(p.246)』に繋がるものであり また 人生を通じて培われるべきことへの前段階であること注目されます。

・ なお 傍論になりますが『幼児教育は、環境を通して・・・、知る必要があります。(p.247 前段)』の記述は 第4章1『・・・おとなの介入を許さない閉じられた空間が必要であること、・・・(p.125)』や第4章5『・・・それが子どもの発達にとってどのように意味があるかというようなメッセージは、決して付け加えたりはしません。・・・(p.196)』という具体的な記述の前提でありましょう。

※ 《おとなの介入を許さない》ものであることの所以については 別途 社会学的見地からの著書と併せて触れることとします。

● 第4章4で紹介され本章で再度記述されている センダック作『かいじゅうたちのいるところ』の動画は本文中からご視聴いただけます。

・ 当方の年代にあっては 日常生活上の通念から幼少時の思考回路を失念しているところですが 各位にはこの作品から 幼少時には《「空想遊び」であっても現実の世界と隣合せでいること》がおくみ取りいただけるものと思料します。